

【子どもの診断:セラピーへの適性とは何か】(1982)

マーガレット・ラストイン(Margaret Rustin)



[※ 原題: FINDING A WAY TO THE CHILD

出典; Journal of Child Psychotherapy, 1982, Vol. 8]

これからアセスメントの或る事例について語ってみようと思います。対象となるのは6歳の男児でありまして、この子どもは離婚した母親の第一子であり、他にきょうだいはおりません。

私どものクリニックに来所したのは、この母子の掛かりつけの医師(GP)からのご紹介でした。母親にサイコセラピーが求められるといった所見でした。以前にも他のクリニックでサイコセラピーを勧められていた模様です。この時点で、子どもの心的状態ならびにその健康が大いに母親の気掛かりの理由になっている旨が示唆されております。

Mrs. Sは、GPを受診した折に、慢性的な偏頭痛そして脚の痛みを訴えており、それにアレックスについても髪の毛が抜け落ちてきているのがとても気掛かりだと訴えておりました。病院での検査結果は、それらの症状は基本的に心身症的なもので器質的には何ら異常がないとのことでした。その数ヵ月後、母親はアレックスが<死にたい..>と漏らしているということ、それでナイフを使うとやら口走っていたということ、それにまた就寝中にガバッと跳ね起きて、夢遊病的に室内を歩き回ることがあるといったことも訴えてまいりました。母親は、息子は父親としばしば面会することがあり、そのことで決まって心乱されるようだという懸念を日頃覚えていたわけですが。父親との面会の回数は、週に3回ほどということで双方に同意されていた模様です。

このケースに関して、当初まず検討されましたのは、おそらく母親も息子もそれぞれ個別にセラピーが必要かもしれないということでした。心理的葛藤が身体症状に転換するといった「身体化」の程度はかなり深刻だとうかがわれましたし、また母親が必死になって援助を求めて訴える様子にわれわれとしても強く印象づけられたとも事実言えましょう。それで取り敢えず、われわれの最初の取り組みとして、母親のパーソナルなニーズが何であり、アレックスのそれが何であるのかをきちんと区別して考えられるように、まずはそうした課題を念頭に、彼女と話し合っただけのつもりで進めたわけですが。彼女自身の問題が何であり、それに彼女の親としての息子への気掛かりなことが何であり、そして実際にアレックスにどのように積極的な関わってゆけばいいのかといったこと、それらを考慮した上でさらなるアプローチを工夫してゆかねばなりませんでした。

それで、差し当たり母親にソーシャル・ワーカーとのコンサルテーションの機会を提供することにしました。その診査の際には、彼女がアレックスにアセスメントを受ける機会を希望するかどうか、またいずれ将来彼がここで治療を受けるとして、実際問題としていくらでもそうした可能性が見込まれるか否かが確認され、さらにはこの子どもの置かれている法的状況やら彼がどのような監督保護下にあるのかといったことを予め明確にしておくといった狙いがありました。このコンサルテーションにおいて、いずれアレックスのアセスメント後には担当のセラピストが継続してお会いすることは可能であろうという旨が伝えられました。そして、彼のためにどんな援助が適当であるのかをご一緒に相談して決めてまいりましょうと示唆されました。そこでわれわれが取り組むべき主題の一つは、子どものセラピイが順当に毎週継続されてゆくうえで、そのセッティングの維持に不可欠であるところの「親としての責任能力」が充分かどうかをじっくり見定めることであります。Mrs. S. は、そうしたわれわれ側のアプローチを了解し受容しましたし、予約時間にきちんと確実に来所しております。それも実際のところ、夏季休暇が間に入ったせいで、こうした診査の段階と実際にアレックスのアセスメントが施行されるのには随分と間が空いてしまったという事情はありましたけれど・・。

私は、Mrs. S. とご一緒に取り敢えず現在の状況についてあれこれ思うところをお伝える機会を得まして後、アレックスとは2回ほどアセスメントのセッションを用意する旨を伝えたくたわけなのです。そしてまずは第一回目の当日、私が彼らを出迎えるべく待合室に赴きますと、そこには薄汚れたふうの、いくらかポチャとした感じの小柄な男の子がいました。緊張し、ややうんざりしたふうな面持ちであります。母親は優しくかつ思いやりのある態度で彼に應對しておりました。そして彼は促されて、私と一緒に付いてまいりました。私の部屋に入室しますと、彼はまっすぐにテーブルへと向かいます。そこには彼のために用意されてあった物があったわけです。絵を描くためのもの、小さな人物像、動物そして車、それにハサミなど。それから私の方をも、また部屋の辺りをも何ら一瞥することもなく、それらと遊び始めます。私は彼に、私自身を紹介するかたちで、ここでどういうことを担っているのか、その役割について説明し、また彼と会うのは2回ほど予定されていることなども説明されたわけですが、その間も、彼がそれらに耳を傾けていられたかどうかは全然確かではありません。彼は車を手に掴み、それを車の入っていたプラスチックの箱に向けてまっすぐに何度か走らせませす。幾らか粗暴な感じを与えました。彼はそれから粘土を手に掴み、何を作ろうかとちょっと思案しているふうでしたが、すぐさま人形のほうに気を奪われて、粘土を放棄してしまいます。それから何やらひどく込み入った複雑なゲームが始まり、そこで起こる事柄は電光石火のごとき勢いで次から次へと連続して変遷してゆきます。まず最初の辺りでは、2つの家族がありました。一つのほうには、母親と男の子の赤ちゃんがおりました。もう一つのほうには、おばあちゃん(母親と呼ばれる)と大きな男の子〔実際には父親の人形〕、それにいろいろの小さな子どもたち(赤ちゃんと呼ばれる)、そして種々雑多な他の大人たちがおりました。小さいほうの男の子と大きなほうの男の子がずうっと凄まじい取っ組み合いをしております。そこには、いかにも殺意と敵意をはらんだ粗暴さが際立っております。

彼に私が尋ねた質問の殆どは無視されました。が、アレックスは、小さい方の男の子が怒っているのは、彼が他の家族のところにいる赤ちゃんに対して嫉妬しているせいだということを私に語りました。(事実彼のお家には赤ちゃんはおりません。)殺意の漲った乱闘シーンが繰り広げられ、ついには警察が介入するという事態が何度となく勃発します。大きい方の男の子は刑務所へと連行されていきます。だけど、それも実際のところ、途中でうやむやになって尻切れトンボのまま終わってしまうのです。小さい方の男の子が傷ついたときも、病院へ救急車で運ばれてゆくわけですが、やはり結局のところうやむやで尻切れトンボのまま終わってしまいます。それというのは、場面がその都度あまりにも目まぐるしく変化して、どの場面も一向に完結に至ることはなかったせいです。アレックスは、ちょっと私の方に体を向けて、こんなふうに説明します。<彼は、刑務所に連行されはしないんだよ。だって彼はまだ21になっていないんだからね・・・>と。そして救急車が到着した時点で、彼は補足して語ります。<彼らは彼を病院へ運ぼうとしている。彼は悪い子なのにさ！>と。こうしたことを、全然何の感情も交えない単調な声音で語りました。私は彼の気持ちを尋ねてみようとして、彼にこんなふうに語りました。このクリニックというのは、ママが彼を私に会わせるために連れてきたところだけど、それはなんだかとてもヤバイところなんじゃないかと思ったかしら。つまりね、ここが傷ついた人、もしくは病気だったりした人を助けるところなのか、それとももしかしたら悪いことをする人を罰するところなのか、どちらか彼にしてみればどうにもはっきりしないわけで、それでひどく気を揉んでいるのではないかと。アレックスは首を横に振って、そうじゃない、ぼくはそんなふうに思ってなんかいないよ、と答えました。

ゲームでは、家族グループのそれぞれのメンバーが頻繁に入れ変わります。そして小競り合いが勃発しますと、それに参加するそれぞれの成員はどちら側に加担するかスタンスが著しく不安定で容易に変貌してしまうわけです。ここに垣間見られるテーマとは、小さな男の子の方が母親を守ろうとすること、そして二人の男の子の間に熾烈な競争意識があるということ。それはしばしば遊びの中で、一人がもう一人の首やら肩に乗かって自らの力を誇示して相手を抑え付けんとしているといったことに窺われます。恰も犠牲者を地面に思い切り投げつけんばかりの有り様でした。こうした際互いに身体ごとぶつかり合う取っ組み合いは、ひどく残虐さが際立っておりました。実際のところ、相手の眼、口、性器めがけて攻撃しますし、魔術的でアクロバットの早業が目立って横行していたわけです。

私は全精力を傾け、そこで何が起きているのかゲームの展開をフォローしようとしていました。そしてアレックスにしても、どうやら私に事の顛末をちゃんと判ってもらおうという気でいたように思われます。私がシークエンスごとにどうにか筋立てを試み、理解した事柄を彼に語った折、充分私が彼を理解していないと察知するや、彼は注意深くそれを訂正しました。ぎこちない、下手なスピーチではありましたが・・・それで私としては一瞬立ちどまることが出来、そこでどうにかうまく要領を得て、新たに体勢を立て直してゆくことが出来たわけでありました。

そのようにして彼に語り続けることで、どうにか接触を維持しようと私は努めました。まずは暴力そして残虐さといったこと、それから人形さんそれぞれの人物が抱え持つ憤りについて、それから皆誰もが

どうやら混乱の真っ只中であって四苦八苦しているといったことも…。家族のうちの誰が誰やら、どっちがどっちやら、良い人なのか悪い人なのか、味方が敵かもさっぱり訳が分からぬといったみたいなのねといった具合に語り掛けました。しかしながら、ゲームは執拗に続いてゆきますし、アレックスは私の語ることにはてんで興味を示すことはなかったわけです。

こうした面談において私自身が一体どういう状況に置かれていたかを振り返ってみますと、私は果てしなく延々と続く‘恐怖物語 (horror-story)’ の目撃者もしくは立会人といったことのようにあります。死はとことん終わりが無いのです。つまり主人公は何度となく死ぬわけですが、それも直に飛び跳ねて生き返り、またまた同じことの繰返しといった展開なのです。私としては、そうした出来事の凄まじく混乱した筋道を追い掛けるのに必死にならざるを得ないわけでした。そこには何らこれといった焦点付けはないのですし、すべての結び付きが絶えず目まぐるしく変転してゆくわけなのです。拷問、苦痛、憎悪、そして恐怖といったものが連綿と果てしなく続いてゆき、そこには意味づけるための何らかの‘枠組み’ が、つまりそれが何故に起こるのかといった意味が把握されるために必要不可欠なそれが、まったく見当たりません。そこにはまさに、衝撃をもろに受けて無感覚なまま麻痺した心の状態やら、破滅的運命が訪れるのを予感してただ震え戦^{おの}えているといった緊迫感のみが顕著なのであります。

私はアレックスに、ここに登場する人物たちが皆誰しもがどんなに怯^{おび}えており絶望的な気持ちでいるかといったことを語り始めました。私がこうした考えをあれこれ言葉にするにつれ、彼の情緒的状态が幾らか変わってゆくような印象を抱いたのです。彼のからだの緊張感が少し弛^{ゆる}んでゆくようでした。その時点までは、彼のからだは緊張で張り詰めたふうで、その手の動きを除けば、まったくのところ何ら動きが見られなかったのです。それから、彼は椅子に座った恰好で、幾らか私のほうに向きを変えたのです。ゲームのなかで起こる事柄の展開の執拗で切迫したペースはほんの少しながら減速してゆきました。ここでようやくわれわれの間でごくわずかながらも了解可能な領域がどうにか見つけられたように感じましたので、私は直接彼にどんなことが怖いのかと尋ねました。彼は私の方に向きを変え、私をまっすぐに見、そしてゲームの手を止めて、<ママが外出するとき怖くなる>と返答しました。彼女が拉致^{らち}されるのではないかと思ったり、それに夜に強盗が押し入ってくるのではないかと思ったり、それで怖くてならないのだと。彼らはナイフで自分とママを刺し殺そうとするのではないかとも思うからなのです。彼らは彼のベッドの下に隠れ潜んでいるのです。私は、それって彼が見た悪夢なのかどうかを尋ねます。彼は、そうだと頷^{うなづ}きました。だが、悪夢と実際に危険を察知して覚醒してあれこれ空想することの心的境界は実に薄く、あやふやなものでしかありません。アレックスがこのことを私に話しているとき、彼は初めていくらか不安感を露わにしたふうに見えました。彼は粘土を手に掴み、それを掌のうで捻^ねっておりました。それで何かを作ろうという考えもなしに、でも何かしら手に握^{にぎ}っていたい、つまり何かにすがっていたいといったふうなのです。

私がまず何よりも思ったことは、恐怖で凍り付いて、心がうつろになってしまった子どもであります。彼の顔は全くの無表情でした。しかしそれは恰も、あまりにも多くの思いが矢継ぎ早に脳裏を過ぎるた

めに、もはや何らコミュニケーションといった形態へとそれらを変容させるだけの心の余裕などありはしないといったわけであります。そしてすべてが消え失せ、ただ残るのは恐怖のみといったふうに・・・私は彼に話しかけ続けることが大事だと思いました。それも静かに、ゆっくりと・・・そして、どうにかこのセッションの経験に何らかの‘枠組み frame’が出来てゆくことが意図されたわけです。そこで、まずはクリニックについて彼に語って聞かせました。ここは子どもたちが恐怖とか心配事とか何でもいろんなことを話すことの出来る場所なのだとすることを。そして彼が内心どんなにか怖がっているかということを私に理解されたいと思っているといった彼のニーズについても触れました。それで、これからセッションの最後には、待合室にいるママと一緒に彼がもう一度来週ここに来て私と会うという約束を取り決めることになっていると説明しました。おそらくその際には、さらに彼と私とがこの件でもっと話が出来、そして彼が今後援助されるうえでどんなことが考えられるかを一緒に話し合うことになるだろうといったことも・・・彼は真剣な面持ちで頷きました。私はここで、彼の頭の中は先ほどから私に示してくれたように、いろんなことでいっぱいであり、他のことなど全然考える余裕がないのよねと語りました。するとこの時点で、彼の顔には悲しみの色が浮かびました。私は彼が極めて感じやすい子どもだというふうに思いました。彼が玩具を片付けた後、私はちょっと自分でも驚いたのですが、自分のほうから彼にく手を洗ったらどうかしら。そうしたい？>と尋ねたのです。確かにひどく汚れていたのは事実ではありましたが。そして彼はいくらおざなりながらも手を洗って、それから拭き取るといったことを楽しんだふうでした。そして後になって、私としては内心ちょっと訝しく、彼にあんなふうに世話を焼いたのはどうしてだったのかと、彼が私に与えた、そのような極めて具体的なインパクトについて、あれはどうしてだったのかしらと、しばしばこれ思い巡らせていたわけであります。

われわれが二階の待合室に戻りますと、彼は私に背を向けたまま、すばやく学校に戻りたいと言い、立ち去ってゆきました。翌週彼の母親が彼を2回目のセッションに連れてきました。私は一人の男性が彼らに伴っているのに気づきます。アレックスはその彼に何ら言及することはありませんでした。その人は母親の同棲者であり、何ヶ月か前からの関係とのことでした。

さて、2回目のセッションは、前回と極めて似たような調子で始まりました。残酷さはいっそう募って加速されてゆくようでした。二人の男の子の双方の意図は今や公然と拷問ともいえる類いのものがあります。つまり勝ち負けがもはや問題ではなく、ただ相手に苦痛と屈辱を与えんとすることに眼目があったわけです。それぞれに競争相手を出し抜かんと躍起になってまいります。そこで繰り広げられる曲芸的な奮戦ぶりは、実にスーパーマン的ともいえました。そして事実、そこで何が起きているのかを語る際に、彼はそれら二人をスーパーマンとスパイダーマンだと語っております。ここでは、今や母親的人物は暴力の餌食になることから守られてはいないようでした。二人のうちのどちらかに加担し、それでその都度いっそうのこと巻き添えを食らって惨い目に遭う^{むご}といった状況でした。

ここで新しいテーマが出現しました。アレックスは粘土で‘牢獄’を作ります。そこに三人の主だった人物が据え置かれ、そのまま粘土に深く埋め込まれた状態で勾留されております。事実、からだ半分

が生き埋めの恰好です。そして彼は、彼らの脚にそして両手にも巨大な重石おもしが付いているということを語ります。彼らが逃亡しないようにということでした。彼らが逃亡を図ろうとするや、彼らは引き戻され、重石はいっそう追加されていったわけです。このことは、彼がこうしたもの思いに深く没頭し、あまりにも囚われてしまっており、そこから彼自らを解放し脱け出すのはもはや絶望的といった内的経験の具体化であるように見受けられました。ここで何度となく繰り返され、挙句には破滅に追いやられるといった、自由へ向けての逃走の企ては、何らかの介入を希求せんとしての彼なりの精一杯の‘嘆願’とも考えられなくもありません。すなわち、そうした介入が新しい機縁き縁をもたらすといったことにもなり、‘変化の可能性’の前兆となるやも知れないといった意味でなのですが。と言いますのは、一見乱雑でハチャメチャな事態は尚も続いており、目まぐるしい変化と興奮おどろの坩堝くわといった幻想に始終駆り立てられているとしても、全体の印象は、極めて死んだような無時間的な停滞がますます濃厚になってゆくようでした。それは彼の生涯をとおして、またそれを超えて未来永劫に波及してゆくかのようであり、まさに彼は崖っぷちのピンチに立たされていたとも言えるからであります。

私は再びアレックスに語り掛け始めました。クリニックに通ってくるのが彼にとって必要なのではないかしらって私は思うのね。おそらく彼のいろんな取り憑かれて身動きつかなくなっている恐ろしい考えのあれこれについて考えられるように誰かに援助してもらうことが必要ではないかしら・・と。さらに私はこのことについてママと一緒に話し合うこと、そして彼女はこうした援助をここで彼が得ることを求めているとも思われること、そしていずれ彼が定期的にここに通ってこれるようにいろいろ調整してゆくことが出来たらいいと思っていることなどを伝えます。そしてもう一つ大事なこと。ここで、彼に会うことになるのは私本人ではないと、つまりここで将来彼と一緒にセラピーに携わる、どなたか別の人をいずれ探すことになるとういう点を、私は彼に説明しました。

これらのことを総て伝えるのに結構時間が掛かったわけですが、彼は語られたことをどうにか飲み込めたようでした。そこで彼はゲームを止め、黒いペンを手に取り、絵を描き始めます。彼は‘白い大地 (White Land)’の絵を描きました。彼は、それを宇宙そして月に関連づけます。それは一見して、とても良い所に見えました。彼がそこを目指しておそらくいつか旅立つといったようでした。ところが、すばやく画用紙は、おそらく侵入してくる攻撃者に対峙するために備えての精巧な武器類で埋め尽くされてしまいます。彼は、これらについて、とてもあけっぴろげに語りました。私はこの絵の内容に興味を抱きましたが、それと同時に、またそれにも増して、彼のコミュニケーションのモードが変わったことに興味をもったのです。それはおそらくこういうことでしょう。クリニックというものがどういうものかを私は彼に伝えたわけですが、すなわち彼の抱く心配事に対応するためにここがあると、そうした考えをどうにか彼に分からせることが出来て、そしてもし彼が私のことを‘彼と一緒に考えてくれる人’と感じられたとすれば、その限りにおいて将来クリニックに通ってくるといったことをもリアルに経験できたであらまいし、そこで想像力でもって届こうとするならばいつか届くかも知れない、どこかに何らかの良い場所があるといった新しい希望が湧き上がってきたということではなかろうかと思われまふ。これを敢えて喩えたとすれば、赤子がみじ惨めな、切迫した心の状態で眠りから眼が覚めたとして、しかしそれにも関わらず母親によって

与えられるケアに反応できるということがあり、そして彼女を自分が待ち望んだ何ものかとして認めることができるということに似ていなくもないように思われます。実際のところ、アレックスの境遇を思いますと、彼に必要とされるケアとは、まったくのところ甚大な‘排泄物’に対処し得るものでなくてはならないといったことに関連づけられはしないかと考えます。彼の場合、そうしたものにどうやら尋常ならざる脅威として圧倒され、それが生き活きた感覚から彼を遠ざけている、遮断しているといったことに問題の核心があるともいえましょう。彼は、まずは汚れたオムツを換えてもらわなければ、おっぱいを吸うことも、もしくは周りの何にも一切関心を向けられない、まるっきりそんな赤子を想起させるのであります。2回目のセッションの最後に私が興味を覚えましたことは、彼が私の部屋にある洗面台へ赴き、そこで手を洗ったことです。それは前回のセッションで彼が私に促される恰好でそうしたという記憶が想起されたことを示唆してるわけですが、今回は彼自らがそれを自分の意思でそうしたわけであります。

このケースの場合、子どもの治療へ向けての外的枠組みは事実とても堅固であったといえましょう。母親は、ご自分でも深刻な問題を抱えておいでであったにも関わらず、とにかかにも援助を探し求めておられて、息子の問題についても十分に考えを巡らすことができていましたから、治療に臨む覚悟という点では心準備は出来ていたわけです。実際のところ、毎回クリニックに通うにはかなりの距離がありましたから大変であったわけですし、父親からは反対もあったわけですがけれども…。彼女はこの件で、ボーイフレンドからの支援を得ております。それで彼を私にも合わせにアレックスについて話し合う場に連れてきたわけであります。

この子どもの内的世界をじっくり眺めてみますに、そこに彼の抱える、極めて複雑に錯綜し混乱したさまざまな経験についてしっかりと考えを巡らし得るような‘思考の枠組み a thinking frame’があったようには窺われません。未成熟なころには、それらは総てあまりにも尋常ならざる重圧であったということになりましょう。彼の実際の経験から推察しますに、どうやら彼の父親は母親に対抗すべき倒錯的な共謀を彼に強いたといったことのようにあります。そして彼の母親はまた、彼の苦悩に同一化するばかりで、そしてさらなる混乱を深めていったわけで、限界を示して適切に彼を擁護するといった大人の振る舞いをするのが出来ずにいたということになりましょう。しかしながら、アセスメント面談においてアレックスは、私が‘コンテインする心の枠組み’といった概念をどうにか彼に伝え得るだけの手立てを見つけたとき、どうやらそれを活用できなくもないといった証拠 evidence を示したわけであります。ここでのセラピが彼にとって意味のある経験になるのではなからうか、そのように私には感じられました。なぜならば、私は彼の悪夢的世界に幾分かは引きずり込まれたにしろ、そこからどうにか自分を建て直し、彼に向かって話し掛けることができたわけですし、その結果、彼は自らがどういう状況にあるのかを私に理解されたということを実感したわけですから。

ここで私は、サイコセラピへの適性をアセスメントする場合の私のアプローチの仕方について、アレックスと共にした経験から考察してみたいと思います。私が提供するところのセッティングは、子どもたちがそこでそれぞれの‘内なる世界’を私にコミュニケーションできるように万事お膳立てされているといえます。

ところが、この子どもアレックスの場合、私に彼から伝えられたもっとも差し迫った事柄とは、彼の遊戯やら会話などの内容に見出されるものではなく、むしろこの面接中に醸し出される^{かも}ところの、何かに終始気を奪われていて、まったくのところうわの空状態であるといった、そうした画一的な性質なのでした。彼は、ごく普通の意味で直接彼自らについて尋ねられる質問のあれこれにはまるで返答することは出来ませんでした。何が好きかだとか、学校は、友だちはとか、ですが…。彼が生きている世界とは、もしそう言っていえば、外側から見てですが、事実上決定的に彼の内なる世界の苛烈きわまりない空想によって形づくられており、すなわちそれが彼の心的スペースをまるごと占拠してしまっているような具合でありました。彼の現実 reality と接触する能力が著しく疲弊しているように窺われるのは、未だコンテンツされないままの‘空想生活 phantasy life’にまったくのところ阻まれているせいでもあります。殊に2回目のセッションに於ける遊戯の一つがこのことに関係づけられるかと思われまふ。粘土で作られた‘牢獄’です。大きな粘土の塊りが受刑者の頭に^{おもし}乗つけられておりまふし、またそれは彼らの眼をも覆っていたわけだ。ですから、彼らは文字通り暗黒の世界に存在していたのです。その漆黒の闇を突き抜けることなどできませんから、彼らには‘見る’といった知覚的機能の持ち合わせがないということにもなりまふ。

彼の母親と話をしまして、その結果、こうしたイメージがさらに敷衍されてまいりました。学校で彼はいかにも‘彼だけの世界 a world of his own’に居るといったふうに眺められているということであり、また学ぶということが全然出来ないでいるということでした。担任の先生は、彼が十分に知的には問題がないということを確認していたにも関わらず…。また彼が他の子どもたちと遊ぶにしても、得てして、彼らは彼のゲームを遊ぶということになるんだそうなのです。それも、いつものことながら「死」に関係しておりました。そして彼は、仲間たちを言葉巧みに誘導して彼が仕組んだとおりの役割をやらせるわけなのです。そのように母親は語っております。彼はどうやらこうしたゲームではいつも‘良い人’の役をやるようです。それもしばしばスーパーマンといった万能感的人物で、彼が私に見せたように、彼はそうしたスーパーヒーローに同一化しているわけだ。つまりのところ、そうした人物のみが、彼が心底怖がっているところの万能感的破壊力に対抗するだけのチャンスありと見込まれるからなのでしょう。

このアセスメントを通して私は、情緒的発達、および経験の能力 (capacity for experience) の観点から、子どもの現状を掌握せんとする機会を得ようと試みたわけですが、それと並行して臨床的介入によって将来果たしてこの子どもにどのような変化が促進され得るかといった点について^{みた}診立てをする思惑もあつたわけだ。この理由から申しますならば、子どものアセスメントに用いる技法は、当然ながらこれに引き続く治療場面においても採用し得る態度の要素が備わっていると言えまふ。なぜなら、子どもが私を、そして構造化されていない面接場面をどのように活用し得るのか、それをじっくり探索してゆくといった意図があるからです。そこで観察されます個人的な転移については一切解釈を控えるとしても、子どもが与えられたコメントにどのように応じ、また私にこころの内のさまざまな側面をどのように引き出して見せてくれるか、その‘オープンネス openness (開けっ広げ・率直であること)’を試す狙いがあつたということになりまふ。私はまた、子どもが私に与える情緒的なインパクトというもの

にもしっかり目を据えることが重要だと思っております。つまりその治癒可能性 (treatability) について結論を下すに至るまでに、この逆転移の証拠 evidence の意味するものについてじっくり考えを巡らすことなのであります。言い換えれば、私は、アセスメントのプロセスを、患者の中にもたらされる「変化の可能性」について吟味検討するといった意味合いで使っていることになりましょう。つまりのところ、こうした治療的セッティングそして治療的関係性に於いて、‘変化’ がどれほど促進されるかといったことになりませんが・・・すなわち、「Concepts of Change (変化という概念)」こそ、まったくのところ精神分析的サイコセラピーに活気を吹き込んでくれるものであるわけですが、私の子どもとの最初の接触であるアセスメントにも、それは浸透していると言ってもよろしいでしょう。もちろんセラピーそのものとは多くの重要な相違はあるのは確かでしょうが・・・。

上記のアレックスとのセッションは、彼の中の関係性を築いてゆく能力がどれほど未発達であるかということを例証しております。面接時間のほとんど、私は、自分が部屋の中に彼と一緒に居るもう一人の誰かといった感じを抱くことはなかったわけです。彼にしても事実、‘私’の部屋の中に居るといったことも、また目の前に用意されていた玩具も私が予め彼のために用意しておいたものだといったこともまるで無頓着のふうでした。しかしながら、そこから展開した出来事から推して、たとえかなり原初的レベルであったとしても、彼は自分が誰かに耳を傾けてもらい、そして心にしっかりと抱えられる必要性 (a need to be listened to and kept in mind) があることに気づいているということを私に示してくれたと考えていいでしょう。それからまた、確かに混乱を極めた諸々の彼の心的状態について、どのようにして知り得るものやら、さらにはその理解したものをどのように彼に語ったものやら、私としては大いに困惑したわけですが、そうした難儀な状況を切り抜ける上で、彼は私がかうかまく勘^{かん}を働かすことに力を貸してくれたと言えましょう。それでどうにか彼の内的世界に接近できたわけです。だとしても、やはり飽くまでも私の態度やら彼に語り掛けるそのありようの中には、彼に‘私のところを経験させること (an experience of my mind)’ が与えられていなくてはならなかったように思われます。つまりはそれも、彼と一緒にあった私の経験をいつか将来よりいっそう大きな枠組みの中でコンテインできるようになってゆくためなのであります。アレックスは、スーパーヒーローが唯一彼の頼れる希望であると感じておりました。しかしながら、もしも大人たちが味方になってくれるとしたら、それだって何かしら助けともなり、有益でなくもなさそうだったことを、どうにか彼は感じ取れたように見受けられたのであります。

Tavistock Clinic,
Belsize Lane,
London NW

(訳出; 2020/06/12)

《補記; この論文は、ロンドンの地で1982年11月に開催された「the Inter-Clinic Conference」に於いて発表されたものです。The Tavistock Clinic での臨床について概説された一連の発表の一つでありまして、此の回のテーマは、「Concepts of Change (変化という概念)」でした。》

【訳者あとがき】 ～セラピストの‘経験するところ’が与えられるということ～

山上 千鶴子

これは凄い！！この論文の中には、マーガレット・ラスティンの真骨頂が遺憾なく発揮されている。実に秀逸である！

さて、その真骨頂とは何か。まず何よりも、彼女の「死の本能(衝動)」への感受性が挙げられよう。この論文の原題は FINDING A WAY TO THE CHILD である。これをそのまま和訳すると、「子どもに届くための手立てを探し求めて」といったことになろうか。いかにも日本語としては今一つ変。要領を得ない。それで内容の要約からして「子どもの診断: セラピイの適性とは何か」という題名にした。間違っていないだろうけれども。だが、「FINDING A WAY TO THE CHILD」という題名には、マーガレット・ラスティンの気持ちを推し測ると、深い思い入れやらこだわりが窺われるように思われた。まずこのタイトルを見て、どんなことが連想されるだろうか。この場合の「子ども the Child」とは？瞬間的に、「拉致された子ども」、「蒸発した子ども」、そんなとんでもない連想が私の脳裏を過ぎった。とにかくにも、この子どもは行方不明もしくは迷子なのである。そして背景には「死」の翳りが色濃く帯びている。同時に、そこには忽然と姿を消したわが子を探し求めて、半狂乱になって彷徨う母親の声が聞えるようではないか。〈どこに居るの？聞える？答えて！ママはここよ！〉と…。マーガレット・ラスティンは或る日、タヴィストック・クリニックの待合室へとアセスメントのために一人の男児を迎えに行った。そしてアレックスを目にした瞬間、彼女は何か尋常ならざる感覚に襲われたのではなかったか。そこには「死に神」に取り憑かれた子どもがいるといったふうな…。背筋が凍るようなどこか禍々しいイメージ。大鎌を手にした「死に神」が、黒いマントですっぽりアレックスを抱え込んでいるふうな…。アレックスの無表情で消耗し尽くしているような姿は、すでに彼が死に神の生け贄と化しているかのようで彼女は一瞬立ち竦んでしまったのだろう。そして、これはおそらくアレックスの母親の直感でもあったろう。このまま行けば、死に神が彼を冥府へと連れ去ってゆく。その予感に彼女は恐れ戦いた。無論、それを公然と語るには憚るものがあつたらうから、GPにもそれは言えなかった。そして、一人彼女は苦悶した。ついにアレックスが自殺念慮を口走ったとき、むしろそれは好機だった。俄然母親は動いた。何と少しでも彼を喪いたくはない。その一途な思い。それが「タヴィストック」に繋がった。マーガレット・ラスティンが同じく‘母親の直感’でもって逸早くそれを見抜いた。危ない！と。その切迫感でこの二人はタグを組んだわけだ！つまりは、アレックスを死に神から奪還せんとして…。母親は何としても息子を呼び戻さねばと懸命に呼ぶ。〈アレックス、行かないで、戻ってきて…〉と。だが彼は虚ろな屍しかぼね同然。もはや此の世のすべてが仮象でしかない。つまりリアルであることを止めている。かろうじて自分の捏造する仮象、おそらくはテレビで目にするスーパーマンなどの象徴を借りて、非現実的 unreal な世界にどっぷりと耽溺していた。一人着々と死の本能の赴くところへ向けて、つまり死への旅支度に余念がないといったこと。彼の内側を‘死の衝動’が席捲していた。もはやそれに抗うことを諦めようとし始めていた。だが、何も見えない、何も聞えない、何も感じない暗闇の中を、ふと微かな光が照らした。そしてその

闇の遙か彼方の向こうから何かしら声が届いた。<アレックス、死んではダメ。戻ってきなさい。そっちじゃないのよ。こっちよ！生きるのよ！>と…。どうしたらこの声が彼に届くのか、マーガレット・ラスティンは、粘り強く、慎重に、ゆっくりと時間を掛けて、呼びかける。<応えて！>と心で必死に祈りながら、彼女は奮闘した。外見上は、ただ彼の遊戯に興味を示し、そのハチャメチャな展開に筋立てを見つけようとして、折々に彼と会話を続けていただけなのだが…。勿論そこで何が起きているのかを知ろうとして、だがしっかりと彼女のこころは、彼からの‘応答’に全神経を凝らしていた。死に神の手を振り払い、生還を果たす意思が彼にはあるのかどうか、その心の動きを彼女はじっくりと冷静に吟味していた。勝算は五分五分。だが、何としても見捨ててはならない。そこで、<I am with you(私はあなたと一緒に)！>の声なき声を伝え、それを彼にジワジワと実感させていったのである。心だけが感じ得る、決して目に見えない、この‘綱引き’。そしてついに、彼がこちらを振り向いた。<I am with you(ぼくはあなたと一緒にだね)！>と声なき声が応えた！つまりのところ、これが FINDING A WAY TO THE CHILD なのであったろう。

アレックスという子どもは、私がSt. George's Hospitalで診た「症例マーク」を想起させる。彼が描いた一枚の絵が忘れ難い。そこには、フィヨルドとおぼしき海の深底の「氷りついた街」に鎖で繋がれた二頭の馬たちがいた！それは、彼そしてその弟であったろう。スウェーデン人の実母に捨てられた彼らは、イギリス人の養父母のもとですくすくと育っていったが、マークの凍てついた心は決して養父母に懐かなかつた。養父母は心労を募らせていた。3年もの間拒まれ続けて、痛く傷つき、消耗感を深めていた。母親は辛く悲しく、ただ泣くしかなかった。さて、これら二人の男の子アレックスとマークに共通するものとは何か。それは、凍てついた水底に鎖に繋がれた馬にしる、牢獄で重石を付けられて、殆ど生き埋め同然の受刑者にしる、彼らから<助けて！>の声が全然聞えないということである。彼らの場合、その内なる「死の本能」とはまさにそのように苛酷なのであった。己が無価値であるということであるからして、此の世に生きて、己の居場所を求めることなぞ所詮徒労でしかない。心打ち砕かれた者の絶望が窺われる。この一方で、もう一つ別の「症例メアリー」を私は想い出す。タヴィストックで私が診た症例だが、ちょっと違う趣きなのである。こんな遊戯があった。「闇の帝王ダース・ベイダー」、つまり彼女自身なのだが、それが奈落の底に沈みながら、しゃがれた悲痛な声で懇願する。<接触を願います、どうかどうか…(Contact Please)！>と無機的に執拗に繰り返すのであった。彼女の場合、まだ<助けて！>を言えたわけだ。困みに、彼女は別の折にも、画用紙いっぱい、その表にも裏にもたくさんの「SOS(救難信号)」を必死の勢いで書きなぐっていた。私は傍らでただ呆然と佇んでいた。この子どもの気魄に打たれて…。そして私は、内心密かに大いに彼女の値打ちを信じたわけなのだ。〔※註；これら症例マークとメアリーは《児童臨床の実際》にアップされております。どうぞご参照ください。〕 私は思う。これほどに彼らを追い詰めた私たち大人は一体何をしたのか！と。これほどまでに彼らが苦しまねばならないとは、誠にフェアではない。大人としてのわれわれは詫びずには済まないだろう。そして、今やこれらの子もたちに対して私たち大人はどんな償いが出るのかが問われてゆく。いつか彼らが笑えるようになれるために…。<決して見捨てないよ。迷子にしないからね>といった決意をどうやって彼らに伝えられるのか。そして、常に五里霧中ながらも、とにかく私たちは

彼らに呼びかけ、手を差し延べることしかなかろう。マーガレット・ラスティンがアレックスにしたように…。彼女のこの論文「FINDING A WAY TO THE CHILD」には、そうした必死に差し延べられた‘手’が感じられる。そのことがとても心嬉しい。

さて、ここでアセスメントとは何かと改めて問う。それは本来‘振り分け’である。つまり子どもにセラピイへの適性があるか否かということ。当然ながら、適性の判定基準はシビアである。タヴィストックでの診査過程は実に入念で、通常何年も掛ける。そこには親たちとの面談に携わるソーシャルワーカーそして医師、子どものアセスメント面談をするサイコセラピスト、他にも心理検査を実施し、さらには子どもの学校と連携し情報収集するエディケーショナル・サイコロジストなどがある。アセスメントの段階で、既に一人の子どもを巡って、実に膨大な量のエネルギーが費やされるわけだ。それとまた莫大な経費でもある。私自身は、タヴィストックでもSt. George’s Hospitalでもアセスメントには参加していない。だから本当のところ、その現実の厳密さというのをよくは知らないわけだが。唯、よほど親たちが頑張らないと受け入れてもらえないという印象は承知していた。それはマーガレット・ラスティンのこの論文でも十分に窺われることである。つまり外的条件を充たすという点で親の全面的な協働意識が問われている。つまりタヴィストックが要請するところの規律(discipline)に組み込まれてゆくこと、それを親たちは充分承知しなくてはならない。それも決して不思議ではない。だが、もっと別の事、子ども本人のセラピイへの適性ということについて、それをどう見積もるか。私は正直、よくわきまえていたとは思えない。それが私にとってこの論文の新鮮味でもあった。ああ、そうなんだということ。彼の地で私が担当した幾つかのケースを振り返る。成功例やら、失敗例やら…。どうしてうまく行ったのか、どうしてうまく行かなかったのか。つまりモノになった、モノにならなかったということがあるわけで…。それをセラピイが終了した時点でなら云々も出来ようが、開始される前にそれが云々されることがここでは求められている。モノになるだろうか、モノにならないだろうか…。と。たかだかセラピイへの適性だと言って済まされない。それぞれの子どもの‘値打ち’というものが査定されているのだから。そして‘将来性’も…。一種残酷とも思われる。アセスメントの際、われわれはギリギリの決断を迫られる。この子どもにチャンスを与えるべきか、否か。その分かれ目とは何か、を…。われわれは職業的信念に支えられて、しかもそれを実績に反映させてゆかねばならない。では、どのようにして？

セラピイとは、煎じ詰めるならば‘投資(investment)’なんだというドライな考え方もある。確かに教育も、心理臨床も‘投資’。そして教育に金を掛ける、それで‘元を取る’ことは分からなくもない。だが心理臨床の場合、‘元を取る’とはどういうことを意味するのか。それがタヴィストックのようにNHS(健康保険)のサービスなのであれば尚更、当局筋の検閲は免れまい。無駄金にしてはならないということだ。それへの対応には、かつてのDr. ジョン・ボウルビーのように、政治的駆け引きに於いて辣腕を振るう人物が必要だったろう。そのみならず、おそらく何らかの‘哲学’が要るだろう。マーサ・ハリスがその礎を築いたわけだが。そして尚も、われわれサイコセラピスト一人ひとりの中にそれが求められよう。その一つの‘哲学’がこのマーガレット・ラスティンの論文に垣間見られる。「変化の可能性」という観点での診立てである。それをさらに詳述すると、「死の衝動(本能)」に抗しての‘綱引き’を私たちはやっ

ているということ。勿論「生の本能(衝動)」に加担して…。生きるということが、死と生のせめぎあいであるとして。これは戦いなのだから、単に徒労で終わったなど言うことはできない。くたびれもうけも負け戦も断じて許されない。われわれはこの‘綱引き’に勝って、尚も職業的誇りを堅持することが求められる。セラピストが‘報われたい’と思うことを一概にプロフェッショナルな‘エゴ’だと決め付けたくはない。われわれはむしろ‘報われる’べきであり、‘報われなくてもいい’などほざいてはならない、と私は思ってきた。私が擁護するところの「セラピー哲学」とは、精神分析(的セラピー)とはく自分の値打ちに目覚めてゆくこと>なのだから、患者側にも‘わたしという主体意識’が求められよう。唯虚しいものとしてだけで終わってはならない、食い散らかして終わってはならないということ。だが、その自覚が最初から求められるのは無理だろうか。児童臨床の場合、おそらくは難しかろう。だが、ここでマーガレット・ラスティンは試みている。それは、飽くまでも逆転移の手法である。自分を与え、自分側から呼びかけ続けることで、それにどのように子どもから応答が帰ってくるか、それを見極めてゆく。おっかなびっくり迷路の中を手探りしてゆく。そして行く手に微かな開けが見えてきた。<ああ、大丈夫だ。この子はやってくれるだろう>という信頼感。つまり子どもへのレスpekt、このごく自然な感情が決め手となる。確かに、この子どもアレックスの苦悩は、最初の一瞥から、通り一遍では済まされない、何か切羽詰まったものとして、彼女を揺さぶった。痛ましい！だがそれだけでは先へ進まない。一緒にワークする感覚、自発的な意思の有無が尋ねられる。つまりコミットメントということ。‘共闘精神’とも言っている。セラピーでは、子どもが単なる‘お客さん’であってはならないのだ。<あなたがあなたの意思で始めるということ、それならば、ご一緒にたしましょう>と、そこで初めて彼女はゴーサインを出せたわけなのだ。

最後にもう一つ付け加えることがある。このアセスメントの状況において、マーガレット・ラスティンのセラピストとしての優れた手腕とでもいうべきだろうが、その逆転移に「乳児観察」の経験(もしくはご自分の育児経験)が色濃く反映されていることを指摘したい。それがこの6歳の子どもアレックスの中の‘赤子の部分’、その非言語的レベルでの彼の気分を実に丁寧に掬い取って、生き活きとした理解に繋げている。そこには通り一遍ではない理解の厚み、深み、そして彩りが添えられている。ああ、ほんとうに彼はそういう気分なのね、分かる分かるって、こちらも納得してしまう。因みに、「精神分析的観察 psychoanalytical observation」とは、実にこのように飽くまでも観察者の個人的感覚に根ざしており、その‘心’が目の前の事象をきちんと媒介しているということがその眼目なのである。すなわちその理解するところは、決して‘私抜き’だったり、‘私を棚上げにして’では断じてないのだ。

タヴィストックでは、かつてMrs. ビックが先陣を切って、乳幼児観察をチャイルド・サイコセラピストの訓練の科目に据えた。その歴史的な意義は深い。やがてタヴィストックだけではなく、Mrs. ビックは英国精神分析協会に於いて精神分析家の訓練としてこれを必須科目にしたわけで。それは実に快挙であり、勿論彼女はその功労者なのだから、さぞかしご満悦であったろう。当然ながら、そうした発展は「英国精神分析の伝統」として今後も大いに矚目すべきものと言えよう。ところが正直なところ、私の記憶のなかでは、実際に臨床の現場に、自らの乳幼児観察の経験がどのように反映されているのか

を率直に語れる人を探すのはなかなか難しい。何故なのだろうか？「逆転移」ということがまだタブーとされる気風があるからなのか。慎み深い、そしていくらか窮屈な国民性の故かしら。

ここで改めて、やはりマーガレット・ラスティンという人はとてもユニークな方なんだらうという気がした。確かお二人のお嬢ちゃまの母親なのである。私が彼女に個別スーパーヴィジョンを受けていた1973年末頃確か上のお子さんは4つぐらい、下のお子さんはまだ1歳未満の赤ちゃんだった。こんなエピソードを記憶している。或る日のこと、夕方遅くにKilburnの彼女のご自宅の居間でスーパーヴィジョンを受けていた。どこか奥の部屋から赤ん坊の泣き声が聞えたらしい。私には聞えなかったが、どうやら彼女にはその声が届いたようだ。すっと立ち上がって、しばらく中座し、やがてその赤ちゃんを両腕に抱き抱えて戻ってきた。膝の上に乗せ、そのままスーパーヴィジョンは続行された。赤ちゃんはおとなしく母親の膝の上ですやすやと寝入ったようだった。私はちょっとびっくりしたけれど、全然違和感はなかった。いかにも自然な振る舞いなのであった。そうしたことは1回限りのことで後にも先にもなかったが、何故か印象に深く刻まれた。セラピストである以前に母親である彼女の素顔を見たということ。あんなふうに来るのはやはり彼女らしい。とても懐かしい。それが私にはとても尊く思われる。臨床家のうちに母親のごく自然なセンスが生きている！そんな人は稀有だ。例えば、アレックスに手を洗うことを勧めたこともそうだ。〈Would you like to wash your hands?〉と尋ねたというのいかに彼女らしい。日頃われわれはそんなことはしない。後になって、ご自分でもちょっと唐突な感じを抱いたみたいだが。おそらくここで一瞬Mrs. ビックに叱責されるかなって、ちょっと怯^{ひる}んだかも知れない。だが、構うもんか、と彼女は押し切ったみたい。母親が赤子の汚れたオムツを取り替えながらくきれいきれいにしようねえ。ほらね、きれいになったわね。良かったねえ〉と語りかける声が、そこに聞き取れるではないか。さらには、彼はいっぱしの小さな‘紳士’扱いをされたことにもなる。それで、もはや赤ちゃんではない、自分は大きな男の子(a big boy)なんだから、自分で手を洗うことだって出来るってことを彼女(このレディ!)に示さなくてはという思いが俄然頭を擡げたようだ。そんなふう、アレックスは自分のことをちゃんと誰かが想ってくれている、考えてくれていると、そこでようやくそんなふう感じられ、誰かと一緒に互いに‘繋がっている’感覚を掴むことが出来た。この時、彼は此の世に生還したのだと私は思う。もはや迷子ではない彼がいた！これこそが彼女言うところの〈私のこころを経験すること an experience of my mind〉を与えるといった、祈りにも似た感慨の内実なのであったらう。痛く感動を覚えた。確かにそうだ！！たった2回だけのセッションでも、アレックスがそうだとしたら、私などはもともとそうであった。内心深く頷いた。‘彼女のこころを与えてもらった’こと、それを決して忘れてはなるまいと改めて肝に銘じた。

余談だが、実はあの当時、私は彼の地で‘ないものねだり’でかなりごねていた。やがて、その‘ないものねだり’を封印する恰好で帰国した。誰にももう期待する気は失っていたし、マーガレット・ラスティンともどんなふうに分れたのか記憶がない。実に素っ気無い。当時私は一体全体何を探してもがいていたのか。それが何であったのか、今ここでようやくこの論文で初めて言葉として理解された。すなわち「経験しているその人の‘心’を直接与えられたかった、触れたかった」ということ。唯唯その切望感に尽きる。それも正直なところ、自分にそれが与えられる話だけではない、自分がそれを与えることも実は

問題であったわけだ。実は、彼の地で児童臨床に携わりながら、確かに一生懸命であったにしろ、何といっても余裕のない私であったのだから、内心では心もとなかった。子ども一人ひとりに‘私のところを与える’ことなど、ほんとうに出来たかしらという疑念はずっと付き纏って離れなかった。彼らに対して済まないような、どこかゴメンねという気持ちがあった。それが辛くて、帰国後も長らく持ち帰ってきた症例記録のファイルを開くことが出来ずにいた。だがやがて蓋を開けてみれば、彼らからどれほど私を与えられたかということに気付かされ、私としてはそれで十分に‘報われた’という思いが募っていった。それは、臨床ファイルを覗くまでもなく、私は知っていたのだ。実にその思いが帰国後の私を支えてくれていたと言ってもいいのだから…。さてさて、それで次のこと。つまり、かつての‘ないものねだり’した、まさにそれを此の地で見つけてゆかねばならなかった。すなわち、臨床の日々の中で分析患者一人ひとりに「私のところを経験」させてゆくこと。願わくば心理臨床家として私のところの経験を与えたい、それは帰国後の私の‘願掛け’ともなった。勿論のこと、心理臨床の場合は相手が要る。相手の期待に応える姿勢がまずもって求められよう。だから、果たして付き合えるかしら、そして付き合ってもらえるかしらと、当然ながらおっかなびつくりで、大いに逡巡するには事欠かなかった。だから無理をしない、無理をさせないというのが鉄則であった。たとえ私の信念がいかほどのものであろうと、独り善がりになることは自戒せねばならなかった。であるから、致し方なしとしても、所詮不徹底の極みだと内心忸怩たるものがあつたわけで…。しかしながら、この40年余の個人開業を経て、そろそろ引退の時期を迎えようとしている昨今、振り返ってみるに、今更ながらに自分が十分に‘与えられた’、そして‘貰ってもらった’との実感を抱く。その意味でも、心理臨床家として私は十分に‘報われた’と言い切れる。大いなる慰めである。そして今こうして、マーガレット・ラスティンの論文の中で、この言葉「an experience of my mind」に出会えたことで、改めて彼女との因縁が懐かしく偲ばれ、とても有難く、感謝の念を深めている。帰国後の40年余の歳月を、私は自分が独りだと思ってきた。‘単独者’としての自負で辛うじて生きて来たつもりなのだ。だが全然違った！彼女が一緒だった！ほんとうに、これは何ということだろう？！人と人が繋がっていることの‘妙味’をしみじみと噛みしめ、実に感慨無量である。

(2020/06/15記)